

学位論文要旨

社会的構成主義の学習論における言語と
身体性についての教育学的研究

An Educational Study on Language and the Embodiment
in the Learning Theories of Social Constructivism

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 学習開発学分野
学習開発基礎・支援領域

D182599 須谷 弥生

I. 論文題目

社会的構成主義の学習論における言語と身体性についての教育学的研究

II. 論文目次

序 章

第1節 問題の所在と研究の目的

第2節 先行研究の検討

第3節 研究の方法—考察の対象、観点の設定、考察の手順—

第1章 デューイ学習論の再検討—言語の二義性と経験の身体性—

第1節 デューイの学習論における「言語(language)」の二義性

第2節 デューイの経験概念と構成

第3節 デューイ・スクールにおける統合的・教科横断的な実践の特徴

第4節 本章のまとめ

第2章 ヴィゴツキー学習論の再検討

—言語の媒介性とミーメシスとしての身体性—

第1節 ヴィゴツキーの言語の捉え方

第2節 ミーメシスとしての身振り

第3節 発達の最近接領域における知の構成

第4節 本章のまとめ

第3章 ブルーナー学習論の再検討

—言語による構造とナラティブにおける身体性—

第1節 学習における「構造 (structure)」の重要性

第2節 学習者の生活経験と科学的知識の獲得

第3節 ナラティブとしての自己創造

第4節 本章のまとめ

第4章 木下竹次の学習論の再検討—合科学習における言語と身体性—

第1節 木下竹次の伝記的理解

第2節 合科学習の思想

第3節 合科学習理論の特徴

第4節 合科学習理論の特徴からみた実践

第5節 本章のまとめ

結章

第1節 本研究のまとめ

第2節 社会的構成主義の学習論としての知識創造型モデルに基づく
実践のあり方

第3節 今後の課題

参考文献

Ⅲ. 論文要約

序 章

第1節 問題の所在と研究の目的

社会的構成主義の学習論は、構成主義学習論の批判から展開した一つの立場である。日本の学校教育において、社会的構成主義の学習論は、協同学習、協同的な学び、協調学習、参加型学習といった実践形態に反映されており、それらの実践では、関わり合い、相互作用、対話、参加、といった概念が重視されている。これらの実践形態は、2020年度施行の新学習指導要領が目指す、「主体的・対話的で深い学びの実現（アクティブ・ラーニング）」のための授業モデルとして期待が寄せられており、今後もこうした社会的構成主義の学習論を理論的根拠とみなす実践が求められていくと思われる。それにともなって、社会的構成主義の学習論に対するさらなる理解も求められていくだろう。

しかしながら、協同学習といった知識創造型モデルの教育実践は、一部ですでに形骸化してきているとの指摘がある。教育実践においてこのような問題が起こっている背景には、社会的構成主義の学習論における知の性質が明らかにされている一方で、「知の構成過程」は十分に検討されていないということがあるのではないか。知識創造型モデルの授業を学校教育に導入していくためには、その理論的根拠として考えられている社会的構成主義の学習論を再検討して知の構成過程やその特徴を明らかにする必要があると思われる。

そこで、本研究は、知識創造型モデルの実践の形骸化問題に向き合うために、その理論的基盤である社会的構成主義の学習論に位置づく教育言説の批判的再検討を通して、社会的構成主義の学習論を再構築することを目的とする。

第2節 先行研究の概観

社会的構成主義の学習論に関する先行研究として、主に佐藤学と古屋恵太による論を取り上げた。佐藤と古屋の研究では、社会的構成主義の学習論の広がりや鍵概念としての文化的道具である言語の重要性、社会的構成主義の学習論が考える知識の性質を把握することが可能である。しかしながら、学習者主体が知をいかに構成していくのかといった「知の構成過程」が十分に検討されているとは言いがたい。

第3節 研究の方法—考察の対象、観点の設定、考察の手順—

本研究の考察対象を、先行研究において社会的構成主義の学習論の広がりの中で重要な位置付けにある、デューイ (Dewey, J. 1859-1952)、ヴィゴツキー (Vygotsky, L. S. 1896-1934)、ブルナー (Bruner, J. S. 1915-2016) の理論に設定する。また、大正自由教育運動期に学習研究を行った木下竹次の学習論も考察の対象とする。木下の学習論を検討することにより、社会的構成主義の学習論の一つの実践的展開可能性を呈示できるのではないかと考える。

考察の観点は、丸山圭三郎によるソシユール理解すなわち「丸山ソシユール論」である。丸山ソシユール論を考察の観点として設定することの妥当性は、本論の考察全体で示されるものではあるが、知の社会的構成を可能にするダイナミックな素材・道具として言語を捉える言語観を丸山ソシユール論は与える、と筆者は評価するからである。それに加えて、言語の「恣意性」と、「身体性」という基本的性質に

も着目する。

設定した観点から、デューイ学習論の再検討（第1章）、ヴィゴツキー学習論の再検討（第2章）、ブルーナー学習論の再検討（第3章）、木下竹次の学習論の再検討（第4章）を行う。

第1章 デューイ学習論の再検討 －言語の二義性と経験の身体性－

第1節 デューイの学習論における言語の二義性

第1節では、デューイが教育とりわけ言語教育を論じる際に、言語をどのように捉えているのかを明らかにした。デューイは伝統的なカリキュラムで行われていたような、子どもたちの表現欲求を喚起することなく押し進められる、アルファベットや基礎計算の反復練習といった、表象の世界に閉じ込められた貧しい、読み・書き、計算の時間に対してネガティブな姿勢を示した。しかしながら、デューイはこうした記号は知的探求の道具として社会が進化させたものであり、それは子どもの個人的な経験が可能な範囲を超えて子どもを社会的資本へと開くものであることから、それらを学ぶ目的は重要であると考えていた（ポジティブな姿勢）。そこでデューイは、自ら設立した実験学校で「関連的方法（related way）」を用いることにより、形式化しやすい記号の学習を、社会科や理科といった特定のテーマを学習する中で取り組めるようにカリキュラムを組んだ。デューイによるこうした取り組みの根底には、現代の視点から振り返ると統合的・教科横断的な視点があると思われる。

丸山ソシユール論を参照しながらデューイの言語教育に対する両義的な姿勢を考えると、ネガティブな言語教育の捉え方は、修辞や文法の習得に終始する狭義のラングの見方に基づく教育実践に対する批判であり、ポジティブな言語教育の捉え方は、ランガージュを見据えたラングに基づく教育実践への支持であると解釈できる。また、社会的・歴史的に構成されたラングの存在を前提として、子どもたち自身がラングの個人的写像を、内部に構成し社会に参加していくことこそが、デューイにとっての言語を学ぶ意義であると解釈できる。

第2節 デューイの経験概念と構成

第2節では、デューイが「学び」と等価に置く「経験」の概念に着目して、その構成過程について検討した。デューイの述べる経験には、まず、直接的経験と間接的経験の二層があり、デューイがこれらの経験について論じる際に、経験－思考－言語という連関が浮かび上がったことから、経験は言語を介在することによって構成されることが明らかになった。また、直接的経験と間接的経験をそれぞれ含む第一次経験と第二次経験の間には、円循環を形成することが学びにおいて重要であることが考察を通して示された。第一次経験と第二次経験の円循環が、デューイの述べる、経験を解釈・拡張し、生活を豊かにすることの構造であり、二つの経験の間の往還を可能にする媒体が、道具としての言語である。このような考え方は、デューイが構想する学校の設計図にも反映されている。デューイが道具と呼ぶ言語は、具体的な言語実践であるパロールにあたるのであり、われわれはパロールを用いる

ことにより、経験そのものを構成し、第一次経験と第二次経験との間の円循環を実現する。パロールにより経験を構成すること、経験を解釈・拡大することが、デューイの学習論における「言語を用いた知の社会的構成」であると言える。

第3節 デューイ・スクールにおける統合的・教科横断的な実践の特徴

第3節では、第1節と第2節の考察を通して導かれた統合的・教科横断的な実践の必要性を踏まえ、デューイ・スクールにおいて実際に行われた実践の特徴を明らかにした上で、現代の学校教育における実践の展開例を展望した。

第2章 ヴィゴツキー学習論の再検討 －言語の媒介性とミーメシスとしての身体性－

第1節 ヴィゴツキーの言語の捉え方

第1節では、ヴィゴツキーの言語観を把握することを試みた。ヴィゴツキーは、高次的精神機能（意識）の発達を説明する根本要因として、活動ではなく言語を採用していたのであり、心理学が考察対象に据える人間の内的な能力の発達を明らかにする鍵が、言語或いは言語の発達にあると考えていた。

また、ヴィゴツキーは、人間と類人猿の区別を、言語を媒介とした道具の使用に見ていたことから、ヴィゴツキーの述べる言語とは、ランゲージを視野に入れていたと理解することが可能である。ヴィゴツキーは、心理学や言語学における分析的手法に対して批判的であり、言語行動（パロール）を研究対象にする必要性を提唱した。

第2節 ミーメシスとしての身振り

第2節は、書きことばの前史として位置づけられる「身振り」の機能、言語獲得と身体の間わりについての検討である。ヴィゴツキーは、身振りと文字記号を結びつける契機として「描画」と「遊び」の二つを挙げている。描画や遊びの中で見受けられるこうした子どもの身振りは、書きことばの前史として現われる特徴として位置づけられていることから、ヴィゴツキーが考える書きことばの基盤には身体の使用を認めることができる。

ヴィゴツキーの述べる、話しことばの内在化や書きことばの習得は、ミーメシスの概念において理解することが可能である。これは、言語の身体性を説明する際に参照した、尼ヶ崎の述べる「なぞり」としての言語獲得と通じている。特に書きことばの前史として位置づけられている身振りからも分かるように、言語の獲得は身体の使用を基盤としてなされる、とヴィゴツキーは考えていたと解釈できる。

第3節 発達の最近接領域における知の構成

第3節では、知の構成とミーメシスとの関係を、発達の最近接領域を介在させながら検討した。ヴィゴツキーの述べる模倣とは、単なる真似でも、既にできる範囲のことを真似るのでもなく、できないことからできることへと向かう可能性を持つ模倣であり、これはゲバウアやヴルフが言う、人間が文化に参加していく過程としての社会的ミーメシスと重なると考えられる。それゆえに、ヴィゴツキー論における発達の最近接領域概念は、ミーメシスの可能範囲として解釈することが可能であると思われる。

ミーメーシスの可能範囲とは、学習者が或る対象を模倣することができる、その行為の可能範囲を意味する。丸山ソシユール論からこのことを考えると、ヴィゴツキーの発達最近接領域の概念と重なるミーメーシスの可能範囲とは、学習者がラングの個人的写像を形成し、変容させることができる範囲を指していると考えられる。このように理解されるラングの個人的写像の形成・修正は、その規模や形の異なるもの同士が関わり合うことにより、その活動がより活発化するため、ヴィゴツキーの発達最近接領域の概念からは、単学年で構成された学習集団の在り方や、一人の教師対学習者といった固定された教授関係の在り方を見直すことの重要性が指摘される。

第3章 ブルーナー学習論の再検討 －言語による構造とナラティブにおける身体性－

第1節 学習における「構造 (structure)」の重要性

第1節では、ブルーナーが重要視する教科における「構造」に焦点を当てた。ブルーナーは教科の構造を強調することが重要であり、とりわけ学習においては発見を促す興奮の感覚が重要であると述べる。これまでばらばらだった諸事象を学習者自らが意味づけ、自らの中に構造化していくこと、これがブルーナーの述べる「発見」であり、その発見の際に学習者がかみ取るのが「構造」である。それゆえに、ブルーナーは教科における構造を作り上げている根底にある原理を理解し、それを基に教科の課程を作成することが重要であると述べる。ブルーナーの述べる構造の構成とは、学習者が自らのラングの個人的写像を形成したり修正したりすることとして解釈できる。特に構造を把握することは、学習した内容を他の場面に適応して考えること（アナロジー的思考）を可能にすることから、ブルーナーが重視する教科における構造は、言語の身体性を考えた時に浮かび上がるポイントである。その場合、発見という営みが重要な契機となる。

第2節 学習者の生活経験と科学的知識の獲得

第2節では、ブルーナーによるデューイ批判の要点を押さえながら、ブルーナーが学習者の生活経験と科学的知識の獲得をいかに関係づけているのかについて検討した。ブルーナーは、テキストの時代背景を考慮しつつ、生活教育の強調に注意を促す。その上で、ブルーナーは、興味は作り出すことも、刺激して伸ばすこともできるのであり、教育においては、世界と自己をもっと深く、もっと核心に迫る態度で、もっときめ細かく理解する方法を学習者が獲得できるようにすることが重要であると考えられる。教育言説においてしばしば生活経験と対置される科学的知識と、それにより構成された体系的な学問知は、一見すると客観的・静的なものに思われるが、それらは、知を創り出す主体が世界と対峙する中で、パロール³という身体性を伴った具体的な実践によって創り出されたものである。学問知もまた、身体性を伴った言語により創り出された、われわれの具体的な経験や実践と分かちがたく結びついたものなのである。その際、分析的思考と直観的思考との間の円循環が重要である。

第3節 ナラティブとしての自己創造

第3節では、ブルーナーが後期に取り組んだナラティブ研究を参照しながら、自己創造としての知の社会的構成について検討した。ブルーナーは基本的に、本質的な自己など存在しないという立場をとる。知の構成の主体である学習者もまた、物語ることにより構成される存在なのであり、それは構成者自身によるだけでなく、社会的になされる営みである。

ナラティブとしての自己創造は、ラングの個人的写像の形成、変容として考えられる知の構成に、対象的な知のみならず、知を構成する主体そのものも含まれることを示している。学習は、学習者の興味や学習者を取り巻く生活環境、学習者が培ってきたこれまでの経験といった身体性を伴った様々な要素が複合的に絡み合った中で展開されるのであり、学習者主体と切り離すことができない。その際に重視されるナラティブという行為は、構成者自身によってのみなされるのではなく、ラングとパロールの交差の場という他者も巻き込んだ社会性のもとに行われる。

第4章 木下竹次の学習論の再検討 —合科学習における言語と身体性—

第1節 木下竹次の伝記的理解

第1節では、第2節以下の理解を深めるために、木下の生涯と木下が生きた時代背景を概観した。

第2節 合科学習の思想

木下が合科学習を着想するに至った経緯と、合科学習の思想的特徴を明らかにした。先行研究において、木下の学習論はデューイの影響を受けて形成されたものであることが指摘されている。木下の合科学習は、生活の「全一的」・「渾一的」発展や、学習者の生活向上そのものに目的が置かれていることから、吉田敦彦らが主導するホリスティック教育や、プラグマティックな生命観のもとに教育論を展開したデューイの学習論と繋がる特徴を有している。とりわけ、木下とデューイとの間に思想的類似性が見受けられる点に関しては、木下がデューイから直接的に影響を受けたというのではなく、木下がデューイと同様のまなざしを学習者に向け、教育のあり方を模索していたと解釈する方が適切であろう。われわれは、両者の影響関係を明瞭にする実証主義的な視点からではなく、学習者に対して向けられたまなざしそのものの類似性から学ぶ必要がある。

第3節 合科学習理論の特徴

第3節「合科学習理論の特徴」では、合科学習理論の特徴を以下の3点に整理した。一つ目は、学習環境の整理である。丸山ソシユール論から考えると、環境の整理は、学習者にラングの広がり呈示する働きを担っていると考えられる。学習者にとってのパロール₃を生み出すような場の設定が、知の構成を促すために求められる。二つ目は、独自学習から始まって相互学習を経て再び独自学習に戻るといった学習の順序である。木下は、新しい学習内容に入るとき、必ず独自学習から始める必要があると考えており、このことは、学習があくまでも個人によってなされること、相互学習はパロール₃の交差を活発化するために重要であることを示している。丸山ソシユール論で言えば、ラングの個人的写像の形成、修正は学習者主体に

よって行われ、その基になるラングは社会的・歴史的に構成されたものであり、その構成という営みは設定された物的・人的環境といった社会性のもとになされる。三つ目は、指導の計画と学習内容の範囲である。これは、より自然にラングの個人的写像を形成できるようにする工夫であると考えられる

第4節 合科学習理論の特徴からみた実践

第4節では、雑誌『学習研究』に掲載されている合科学習の実践報告を第3節で整理した三つの特徴から検討した。

終章

第1節 本研究のまとめ

言語と身体性という観点から四つの教育言説を再検討した結果、以下の四点が明らかになった。

- (1) 拡張された言語概念
- (2) 生活経験と学問知を構成する科学知の関係
- (3) 知を構成する主体への眼差し
- (4) ラングの個人的写像が形成されるパロールの場

第2節 社会的構成主義の学習論としての知識創造型モデルに基づく実践のあり方

- (1) 統合的・教科横断的な教育課程の設計

社会的構成主義の学習論における言語は、ランゲージを見据えた概念として捉えることが可能であるため、教育実践における知の社会的構成は、言語記号の使用を中心とした言語活動や話し合い活動に限定するのではなく、絵や図、音やリズム、からだの動きなどを学びの媒介物へと拡張することが求められる。このことは、社会的構成主義の学習論が必然的に教科により分断されないカリキュラムを要請することを示している。

- (2) 多元的アプローチが可能な課題（問い）の設定

統合的・教科横断的な教育課程を設計するためには、複数のアプローチで問題を探究することができるような問いを設定することが重要である。そのためには、教科における構造を抽出した上で、トピック中心型、螺旋型カリキュラムを設計することが求められる。ラングの個人的写像は、既存の知と新たな知が結びつけられることによって構成されるのであり、トピック中心型、螺旋型カリキュラムは、この構成を促すことに繋がると考えられる。

- (3) 体験学習と系統的学習との円循環の形成

学習において身体的活動は重要であるが、子どもたちが言語を用いて自らの活動を自覚し、経験を構成すること、言語により構成された書物などを用いて、経験を解釈・拡張していくことがより重要である。学習者の生活経験（パロール）は学問世界（ラング）と架橋されなければならないため、学習者の世界を拡大していくために積極的な教授や介入を行うことが教師には求められる。

- (4) 多様性を有する学習共同体の形成

多様性を有する集団は、パロールという実践がラングという文化的制度を組み替えていくという言語の特性と深く結びつくため、学習においては重要である。異学

年集団と単学年集団の併用、多様な大人と関わる機会の設定、オンラインの活用による専門家との交流機会の設定などが具体的な方策となり得るだろう。

(5) 言語を用いた自己の創造

知を構成する主体である自己もまた、構成されるものであるため、知識の学習の中で、自己に関する語り・ナラティブ（パロール）を導入していくことが求められる。その際の言語は、制度化されたラングに限定されることはない。

第3節 今後の課題

- (1) 知の社会的構成を支える評価の研究
- (2) 教師の省察の在り方に関する研究
- (3) 社会的構成主義と称する教育実践の批判的検討
- (4) 丸山文化論の展開

IV. 主要参考文献

尼ヶ崎彬『ことばと身体』勁草書房、1990年。

ブルーナー, J. S. (鈴木祥蔵・佐藤三郎)『教育の過程』岩波書店、1963年。

(Bruner, J. S. *The Process of Education*, Harvard University Press, 1960.)

ブルーナー, J. S. (橋爪貞雄訳)『直観・創造・学習』黎明書房、1969年。

(Bruner, J. S. *On Knowing: Essays for The Left Hand*, Harvard University Press, 1962.)

ブルーナー, J. S. (岡本夏木ほか訳)『教育という文化』岩波書店、2004年、162頁。(Bruner, J. S. *The Culture of Education*, Harvard University Press, 1996.)

デューイ, J. (河村望訳)『学校と社会』人間の科学社、2000年。(Dewey, J. *The School and Society: The Middle Works Volume 1: 1899-1901*, Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1976.)

デューイ, J. (河村望訳)『民主主義と教育』人間の科学社、2000年。(Dewey, J. *Democracy and Education: An Introduction to The Philosophy of Education*, Macmillan Company, 1916.)

デューイ, J. (大浦猛編)『世界教育学選集 87 実験学校の理論』明治図書出版、1977年、190-193頁。(Dewey, J. *The School and Society: The Middle Works Volume 1: 1899-1901*, Southern Illinois University Press, 1976.)

古田徹也『言葉の魂の哲学』講談社、2018年。

古屋恵太「社会的構成主義におけるヴィゴツキーとデューイー「活動」概念の導入は何をもたらすか」『人文学報』第317号、2001年、63-81頁。

樋口聡(編著)『教育における身体知研究序説』創文企画、2017年。

木下竹次『学習原論』明治図書出版、1972年。初版は1923年。

木下竹次『学習各論(上)』玉川大学出版部、1972年。初版は1926年。

木下竹次『低学年合科学習概論』目黒書店、1938年。

丸山圭三郎『ソシユールの思想』岩波書店、1981年。

森久佳「デューイ・スクール (Dewey School) における「読み方 (Reading)」・
「書き方 (Writing)」のカリキュラムに関する一考察：1898～99年における子
どもの成長に応じたカリキュラム構成の形態に着目して」『教育方法学研究』第
31巻、2005年、85－96頁。

佐藤学『学びの快樂』世織書房、1999年。

ヴィゴツキー, L.S. (柴田義松訳)『新訳版 思考と言語』新読書社、2001年。

ヴィゴツキー, L.S. (広瀬信雄訳)『新訳版 子どもの想像力と創造』新読書社、
2002年。

ヴィゴツキー, L.S. (柴田義松監訳)『文化的－歴史的精神発達の理論』学文社、
2005年。